

=====Mail from 吉村=====2010-7-15=====

杉田さん:

無錫WSのプログラム案どうも有難うございます。質問ですが...

1. せっかく中国に行く機会を頂いた訳ですので、中国人出席者(出来れば中国系ソフトウェア会社の方)からのお話も是非拝聴したいと思います。その予定はあるのでしょうか?

(略)

=====Mail from 杉田=====2010-7-16=====

吉村さんへ

(略)

結論を言いますと、実は「解は身近なところにあるという」ことで、つまり今回のテーマの「次世代のオフショア」のヒントは参加者の中にあるということです。

そういう面で、いささか乱暴に参加者の特長を一言で申し上げると:

- ・中国 IT 黎明期の「魑魅魍魎」の上海で会社を設立し運営された方 (熊谷)、
- ・ソフトウェアの最も権威のある国際会議「ICSE」を北京ではなく上海に誘致された張本人 (岸田)
- ・「コミュニティ」なしで OSS はありえないと上海政府に恫喝された方 (中野)
- ・集中講義で中国重点大学に「ソフトウェア工学」を教え、研究者を養成された方 (荒木)
- ・中国に滞在されてオフショアインサイトを「目の辺り」経験された方 (牧野)
- ・定年後でも同僚が中国で活躍され、太い交流チャンネルを維持されている (奈良)
- ・政府の優遇施策に乗って「OSS での会社」を起業された方 (増満)
- ・中国でのソフトウェア事業を必死でもがいている (杉田)
- ・グローバルプロジェクト最前線で活躍されている方 (松下)
- ・日本のソフトウェア業界に「警鐘」を慣らしながら日中韓連携の新潮流を感じられている方 (佃)
- ・中国ソフトウェア業界の行く末を懸念されている方 (吉村)
- ・地元無錫でオフショア開発を推進されている方 (木村)
- ・当初参加のつもりがなかったのに、たとえ 1 時間でも無錫 WS に「関わり合い (愛?)」を持ちたい方 (鈴木)

以上の一言に関して、「それは何」、「何故」などと議論が発展することと思います。

このようなバラエティ豊かな方々が無錫に集まり、経験を交流すると、何か生まれるものがあるのではと想像します。

=====Mail from 吉村=====2010-7-16=====

杉田さん:

ご返事有難うございます.

私の書き方が舌足らずだったため誤解を与えたと思います. 申し訳ありません.

> ・中国ソフトウェア業界の行く末を懸念されている方 (吉村)

ではなくて,

> ・元同業者として, 中国ソフトウェア業界の将来に興味津々の人間 (吉村)

にして下さい.

もう少し言いますと...

別に懸念はしていませんし, そういう立場でもなく, 不勉強で中国業界の事も全く知らないのです. ただ私はソフトウェア業はどの国でも本来知識集約産業であるはずだと思うので, 彼らはオフショア受注にとどまらず, 何か独自の方向を目指しているのではないかと, もしそうならどんな事を考えているのか, 具体的にどうしているのかなどを知りたいのです. (その行く末を懸念どころかほとんど絶望しているのはこっちの業界のほうです.)

そう思う理由の一つは, 今年3月国立情報学研究所主催の GRACE2010 での招待講演者北京大学の Hong Mei 教授

(http://events.grace-center.jp/symposium/2010/invited_talk_mei)によると, 中国政府はソフトウェア技術の強化を国家戦略の一つと位置づけ, インターネット関連で大がかりな国家プロジェクトが進行中との事です. (会場で東大の玉井哲雄先生と会ったとき, 彼も「中国はすごい事をやっている」と言っておられました.) ならば, あの国のソフトウェア産業界がこういう動きに全く無関係あるいは無関心とは考えにくいです.

さらに, 皆さんよくご存じの ACM の国際プログラミングコンテスト ICPC2010 では, 上位 10 校中で上海交通大学(1位)など計 4 校を中国が占めています. 4 校ですよ! 今年に限った事ではないらしいが, 日本勢はベストテンには一つも入っていません. (たった 2 校, 東大と京大が 14 位にいます.)

<http://cm.baylor.edu/ICPCFinalResults2010>)

こういう状況を見ると中国のソフトウェア産業の将来にはオフショア受注以外に何かもっと重要な事が関係していそうだと想像するので, あちらのソフトウェアハウスの方々の話を聞きたいと思ったわけです.

=====
=====Mail from 岸田=====2010-7-16=====

吉村さん wrote:

- > そう思う理由の一つは、今年3月国立情報学研究所主催の GRACE2010 での招待講
- > 演者北京大学の Hong Mei 教授
- > (http://events.grace-center.jp/symposium/2010/invited_talk_mei)によると、
- > 中国政府はソフトウェア技術の強化を国家戦略の一つと位置づけ、インターネット
- > と関連で大がかりな国家プロジェクトが進行中との事です。(会場で東大の玉井
- > 哲雄先生と会ったとき、彼も「中国はすごい事をやっている」と言っておられま
- > した。) ならば、あの国のソフトウェア産業界がこういう動きに全く無関係あ
- > るいは無関心とは考えにくいです。

北京政府は、インターネットだけではなく、さまざまな分野で、われわれの目からみたら「すごいこと」をやっています。それはしかし、北京政府およびそれとつながった地方政府まわりで起こっているだけのことがらで、一般のソフト会社にはあまり関係のない話だと思います。

今度われわれが訪問する無錫のソフトウェア・アウトソーシング基地も、そうした国家計画の一環として作られたものだと思います。つまり、無煤政府が国からの予算を活用して行った一種の不動産事業。ソフト会社が受ける恩恵は、オフィスが安く借りられるとか税金の優遇措置とかだけではないでしょうか。

インターネットに関しては、現在の中国政府の姿勢は、旧世代の社会主義パラダイムにもとづいているようで、そうした視点でのネットワークの統一的管理はきっと失敗するでしょうね(いまでもかなりほころびている)。

今日、オフィスへ出る前に本屋さんに立ち寄って、マウリッツオ・ラッツァラートさんの著書「出来事のポリティクス」(洛北出版)を買ってきました。

(昨夜わたしが紹介したエッセイは、この本の第3章の旧稿のようですね。
かなり重複しています)

この本の第4章で、インターネットが取り上げられていて、TVそのほかのこれまでのマスメディアとの違いが論じられています。ミハイル・バフチンやガブリエル・タルドのいう知覚や知性の多様性を支援することがインターネットの特徴であり、それは、資本主義であれ社会主義であり、旧来の中央集権的管理のメカニズムとは相いれないということが指摘されています。

来るべき次世代の北京政府首脳は、このあたりの矛盾をどう解決するつもりなのか。毛沢東の「矛盾論」は、そんな問題のことまで予見していたかな？